

アメリカ・インディアンと北米大陸開拓史

Daniel K. Richter, *Facing East from Indian Country:
A Native History of Early America*

星野 勝利

いま手もとに一冊の教科書がある。アメリカ合衆国の歴史の教科書 *United States History: Search for Freedom* (Scott, Foresman and Company, 1977) である。高校レベルと考えられるこの教科書は、700 ページを越える大冊である。目次によると、単元は9つで構成される。ところが、その構成を見ると、9つの単元のうち、じつに第1単元を除く残り8つの単元は、アメリカ合衆国建国後の歴史を扱っている。しかも、第1単元そのものも、単元名が “The Path to Independence, 1492-1783” されていることから分かるとおり、1492年のコロンブスによるアメリカ大陸発見から18世紀後半1783年の東部13州による合衆国成立までを一括して視野に入れたものである。

国家の歴史の出発点をどこに置くか。これは容易に解決できる問題ではない。出発点を明確にするには、まず国家の意味の輪郭を明確にする必要があり、そのうえで歴史的事実との諸関係が明確にされねばならない。ところが、その歴史的事実そのものも、必ずしも明確な輪郭を提示するものとは限らない。事実を事実として認めるためには、それを証明する十全な証が求められる。しかし、これを手に入れることは容易なことではない。証とされるものも、見方によっては、その信憑性に揺らぎが出ることも少なくない。

本書は、アメリカ合衆国の歴史を語る書である。ただし、この歴史は、上記教科書で提示されるような歴史ではない。むしろ、教科書では提示されないような歴史、教科書から欠落したような部分に関わる歴史である。具体的には、ヨーロッパ系白人によって発見され、上陸され、開拓され、文明化されていった北米大陸の歴史、その過程の歴史、それも、白人の視点から眺めた過程ではなく、発見され、上陸され、開拓され、文明化された側、すなわち北米大陸発見と開拓の歴史を受け身のかたちで受け止めて行かざるを得なかった原住民の視点から眺めた歴史である。この意味では、本書の歴史は、北米大陸の「被」開拓史である。

このような視点から歴史に迫るには、視点の転換が必要となる。西欧白人特有

の視点、すなわち絶えず「西」を見る視点を逆転させ、原住民の側、すなわち「東」を見る視点に立つことである。これは必ずしも容易な作業ではない。そのために著者は、次の5つの視点を採用する。(1)よく知られた話の裏側をよむこと、(2)新たな視点で古文書を読むこと、(3)過去を見る視点を再検討すること、(4)総論と各論を融合させること、(5)植民地化の過程よりもその時期の状況を明確にすること、である。ややわかりにくさもあるが、これが本書の方法論である。

かくして著者は北米大陸の歴史を8つの角度から語る。(1)白人到来以前の原住民社会の状況(プロローグ、“Early America as Indian Country”)、(2)西欧白人が東海岸に到来し始めた16世紀頃の原住民の状況(1章、“Imagining a Distant New World”)、(3)西欧物品の流通と西欧白人との交易化が始まる17世紀頃の状況(2章、“Confronting a Material New World”)、(4)この頃の記録に残された人的交流の具体例(3章、“Living with Europeans”)、(5)その交流の中で示された原住民の声(4章、“Native Voices in a Colonial World”)、(6)18世紀頃の北米大陸の政治・経済・社会状況と原住民との関係(5章、“Native Peoples in an Imperial World”)、(7)独立戦争時から19世紀初頭の頃の北米の政治状況と原住民との関係(6章、“Separate Creations”)、そして(8)原住民による原住民賛歌(エピローグ、“Eulogy from Indian Country”)である。

このような角度から語る本書は、多くのことを教えてくれる。たとえば、今から千年ほど前のミシシッピー川東部、現在のセントルイス付近には、50エーカーの広場と100フィートの高さの神殿と約2万人ほどの人口を抱えた都市Cahokiaがあったこと、ほかにCoosa, Etowah, Moundville, Natchezなどの都市が現在のGeorgiaやAlabamaやMississippiの地にあったこと、当時の中心的作物はsquash, maize, beanなどで、交易品としてはcorn, meat, fishなどのほかmarine shells, beads, mica, quartz, copperなどがあったこと、14世紀頃から始まった寒冷化現象により原住民部族の分散化が進んだこと、白人との交易の中ではbeadsやbeaverの毛皮が大きな役割を果たしたこと、交易化は疫病の蔓延を招いたこと、また、独立宣言以前の北米の大部分は、イギリスやフランスやスペインの領土ではなく、いまだ原住民のものであったこと、その原住民は一般に、「インディアン」ではなく「アメリカン」と呼ばれていたこと、などなどである。

このような世界に、やがて西欧白人が訪れる。1530年代には北米カナダ方面にフランス人Jacques Cartierが入り、その数年後には、南方フロリダ方面に、スペイン人Hernando De Sotoが入る。上陸した二人は、必然的に原住民との関

わりを持つ。その関わりは、具体的にどのように行われ、どのような結果を招いたか。St. Lawrence River を遡った前者は、原住民と交わりつつ Stadacona の地に要塞を築き、一方、原住民との交戦を交えつつミシシッピー川以西まで到達した後者は、その帰途不幸にも命を落とす。著者はこの二人の歩みについて、残された資料をもとに語る。おずおずと始まる接触、理解と齟齬、強奪と復讐と和解。結果は一様とは限らない。しかし、上陸に始まる接触を通して、西洋白人と原住民の歴史がここに形成される。

白人と原住民の接触は、一般に「もの」を通して始まる。「もの」の接触は、「ひと」の接触へと進展する。その場合、原住民側にどのようなことが生じるか。この具体例として、著者は Pocahontas, Tekakwitha, King Philip のケースを取りあげる。白人入植者と結婚し、1616年にロンドンにわたり、上流社交界で歓迎され、その地で亡くなったポーハタン族の族長の娘 Pocahontas (英名 Rebecca)。インディアン部落を逃亡し、カトリック系(イエズス会)キリスト教信者となり、布教活動に従事し、1680年、懺悔の断食で24歳の生涯を閉じ、1980年には聖パウロ二世によりアメリカ原住民最初の福者に列せられた北方モホーク族の娘 Tekakwitha (洗礼名 Kateri, 英名 Catherine)。そして、1676年6月、ニューイングランドのイギリス系白人入植者の土地強奪に耐えかね、インディアン諸部族を統合し、植民地連合軍と戦ったアルゴンキン・インディアンの族長 Metacom (英名 King Philip)。これら三つのケースの中に著者は、キリスト教文明を前にした原住民の基本的な心性を見る。conflict ではなく、cooperation や coexistence を求める心性である。比較的よく知られたこれらの物語は、勝者が語る物語であり、著者はその語りがすべてを語っているわけではないことを示唆する。

本書はさらに、白人と原住民の接触の内質を示すものとして、二つの資料に注目する。一つは、マサチューセッツ湾植民地で行われた原住民改宗者たちの告白の記録である。1652年、この会を設定した宣教師 John Eliot は、植民地の指導者たちを前にして行われた告白会の内容を *Tears of Repentance* (1653) として編集し、ロンドンで出版する。この改宗物語 (conversion narrative) の中の一つのケース、インディアン Monequassun の告白のことばの中に、著者は、原住民の改宗に対するニューイングランド・ピューリタン特有の視点と白人編集者の介入の在りようを見てとる。一方著者は、白人と原住民との間で交わされた文書にも注目する。1679年、モホーク族の族長 Maquas とバージニア植民地の代表者との間で行われた和議の様子は、その場に居合わせたニューヨークのインデ

インディアン担当事務官によって記録として残される。この資料の書式やことばの用法に、著者は、白人植民地とインディアン部族との当時の複雑な関係とともに、交渉の儀礼（プロトコル）に関わる原住民インディアンの独特の視点のあり方、文化的共存を求める姿勢を探っている。これらから導き出される次のことばは、資料を通して原住民の視点(vision)に迫ろうとする本書の著者の基本的視点を要約するといつてよい。

Read carefully, the written records that these Europeans used to document their efforts can reveal Native people using the power of the spoken word to articulate a distinctive vision of cultural coexistence on Indian terms. (p. 150)

18世紀から19世紀にかけて、北米大陸は騒乱の時代を迎える。合衆国建国に向かうこの時期は、イギリス系植民地が本国と鋭く対立した時期であると同時に、イギリス、フランス、スペインの三国が、北米大陸を舞台に三つどもえの対立を抱え込んだ時期である。しかもこの対立は、三国それぞれとインディアン各部族との関係、そしてそのインディアン各部族同士の対立と思惑を抱え込んでいた。対立と思惑のこの時代は、原住民の視点から見ると、自らの部族を含んだ合従連衡の戦国時代にも似た社会状況にあった。このような状況の中で、1763年には、白人排斥を目指すインディアンの反乱 Pontiac Rebellion (Pontiac's War) が Detroit で起き、おなじころ Pennsylvania 方面では、プレスビテリアン系過激白人グループ Paxton Boys (Hickory Boys) が、インディアン憎悪の念に駆り立てられて民族浄化の道に走る。このような激しい社会の流れを著者は丹念に追い、さらに当時のインディアンの宗教的指導者 Tenskwatawa, Tecumseh, Hillis Hadjo などについても、その活動内容とその意義をくわしく探る。これが本書のおよその構造である。

“History is an imaginative creation” (p.11). さる歴史学者のことばを著者は引用する。「想像」と「創造」。なるほど歴史は、「想像」によって「創造」される。ことばを通して作られ、物語りを通して作られ、文字により、活字により、文書により作られる。アメリカ原住民の歴史も、もちろんこの例外ではない。この本質にメスを入れること、これが本書の目指す最大の目的であろう。補足説明が必要と思われる事項も散見し、必ずしも初心者向きの書とは思われない。しかし、著者の斬新な試みはかなりの程度成功していると言わねばならない。

セントルイスの高層ホテルの窓からミシシッピー川越しに、東の方角を眺めや
った著者は、そのむかし、東の世界のできごとに目を向けていた原住民のことを
思う。うわさやものを通して流れてくる東の世界のできごとを、内陸奥地に住む
原住民は、はたしてどのように受けとめていたか。この思いを出発点として、著
者は、北米大陸の原住民、アメリカ・インディアンを歴史を追う。その歴史は必
ずしも巷間の歴史書に十分に記載されるものではなかった。しかし著者は、その
一つひとつに、原住民の生きた姿をかいま見る。これを直視しない限り、北米大
陸の歴史、アメリカ合衆国の歴史が、十全な輪郭を描くことはないことは確かだ
である。

(Harvard University Press, 2001, 317pp., \$26.00)

(岩手大学教育学部英語教育講座)